

夕陽が当たって髪が反射光で光る。
おとなしくて清楚で可憐な彼女が優しく笑う。

ああ、この子と付き合えてよかった。
何気ない会話が楽しい。

下校の時間が輝いている。

交わす言葉ひとつひとつに、
日々の読書で得た綺麗な言葉や単語が
混じっていて、聡明さも感じる。

俺にはもったいない彼女だ…。
文緒つよしは強くそう思いながら帰路を二人で歩く。

塚宮ほのかは好きな人とキスしていることや、体を触られていること、口の中を舐められていること、この場のムード、そういったものがあまりに初めてであった。

「んううう…あっ…あっ…こわい…あ…気持ちよくなって…
んっううっ…んっん…!! あああっ…!!
ああああ…こんなの…あまりにも初めてでえ…ああああ…!!」

自分の女としての反応、そのことにもビックリして、体の奥から湧き上がる熱く、いやらしい感情に、戸惑いと共に体の火照りが抑えられない。

「あっ…んんっ…もうっ…はあっ…いけない…
でも…何も考えられない…!!」


文緒つよしは、たどたどしい手つきで胸を触り、体を触る。

ぽんぽん
ぽんぽん

ネッ

じと
じと…

ムニ
ムニッ…



そして目の前に広がるほのかの裸体はあまりに美しかった。
「はあ…はあ…あんまり見ないで…」

しかしそういうわけにもいかない。
一糸まとわぬその姿が、肌の綺麗さ、白さ、みずみずしさ、
そういったものが全て揃っている。

「これ…この…リングを…そう…保健で習った…
でも…避妊具って必要ないと思ってた…。」

はあ…

はあ

ビク

ビク…

赤ちゃんをつくるためにセックスするんだったら
なんで避妊するのって…。
セックスってそのためだけのものだと思ってたから…」

はあはあと吐息は熱く、体を上気させながら、
リングを亀頭の先につける。

「すごいね…こんな…授業では習ったけど… こんなに大きくなってる…
初めて見たし…なんだか…すごいな…ちょっとグロテスクだね…」

龟头を奥へ進めていく。
処女膜が引っ張られて伸びていく。

「はううっ…！ あああっ…！ あっ…あっあっ…！
ああああっ…！」
「あああ…ほのかっ…ほのかあ…！」

肉茎が更に温かさに包まれていく感覚がたまらない。
そして龟头で押されて破れていく処女膜…！！

「あああっ…痛っ…あ…んううっ…ああああっ！」
「ほのかっ…あ…おお…おおおおっ…！！」

グイル
グイル
…

みち
みち…

ギク
ギク…

ほか
ほか

あっ…

あ…

「ほのか…」
「つよし君…」

「あああ…気持ちいい…！」
「つよし君…つよし君がもっと…もっと欲しい…」

もちもち、ふわふわした体のほのか。

体全体、そして股から漂う甘い女の子の匂いと、
髪からのシャンプーのいい香りが気持ちいい。

ズググルル

ムソッ

パルン

ズググッ!

ググッ

翌週の土曜日。

ほのかの自宅が使えるということで、朝からまぐわう二人。

「…今日ってどうするの…？
— 一日中…エッチなことしちゃう…？」



しなな♡

髪持ちいい♡

「俺もう一週間ずっとしたくて…」

「私も…っ…はしたないけど…ずっと…したくて…」

キコッ

キコッ

キコッ

「ごめんなさいっ!!」

つよしは踵を返して、トイレを出ようとする。
が、その時。

つよしの勃起したペニスが掴まれた。

がじっ!!

びん!!



「私もつよくんとエッチなことしたいな～ってね」
「えっ…えっ…ちよっ…!!!」

「お…お姉さん…聞いてないですよ…
こんなことするなんてっ…!!!」

ムニャ♡

「彼氏と別れちゃってさあ 暇なの
でもあんなおちんちん見ちゃったら…
ムラムラしちゃってえ…」

「ど…どういうこと…」
「…さっきトイレで鉢合わせしちゃったんだ…」

ムニャ♡
ムニャ♡

我慢できず、その肉穴を覗く。

満ちている膣肉をかき分けると、さらに奥に、
柔らかく気持ちの良さそうな
隆起、最奥に子宮口が見えた。

「あああ…んっ…つよしくんエッチねえ…
いいよお じっくり見ていいよお」
「っ……!!!」

射精の本当に一歩寸前まで反応してしまった。

「あっ…すごい…です…こんなに
エッチな光景がこの世にあるなんて…」
「じゃあ次はおまんこの試食会始めてえ」

くはぁあぁ…

ひゅっ…♡

ひゅっ…

♡

アッ
アッ

じゅる じゅる

はるかは、ずしずしとおまんこを押し付けてくる。

「うああああ！んぶっ！じゅるる！
じゅぶっ！んぶぶっ！じゅぶっ！」

つよしも、その興奮でピストン運動を速めていく。

んぐんぐ

「もっとお もっと感じてえ はあああ」

はるかはほのかの乳首をすごい勢いで舐めている。

あまあま...!!

んぐ んぐ

んぐ

んぐ

んぐ んぐ

「あああっ...もういやっ...！あっああああ！」

「んぶっ...！おおおお...！！おおおおっ！んぶっ！」

んぐ!

んぐ!

んぐ!

んぐ!

ズグ

ほのかは、はるかの体をどけて、俺を押し倒し、
騎乗位に近い形になった。

ギョッ

「ちょっ…ほのか」
「お姉ちゃんのいいようにはさせない…」

ガンッ

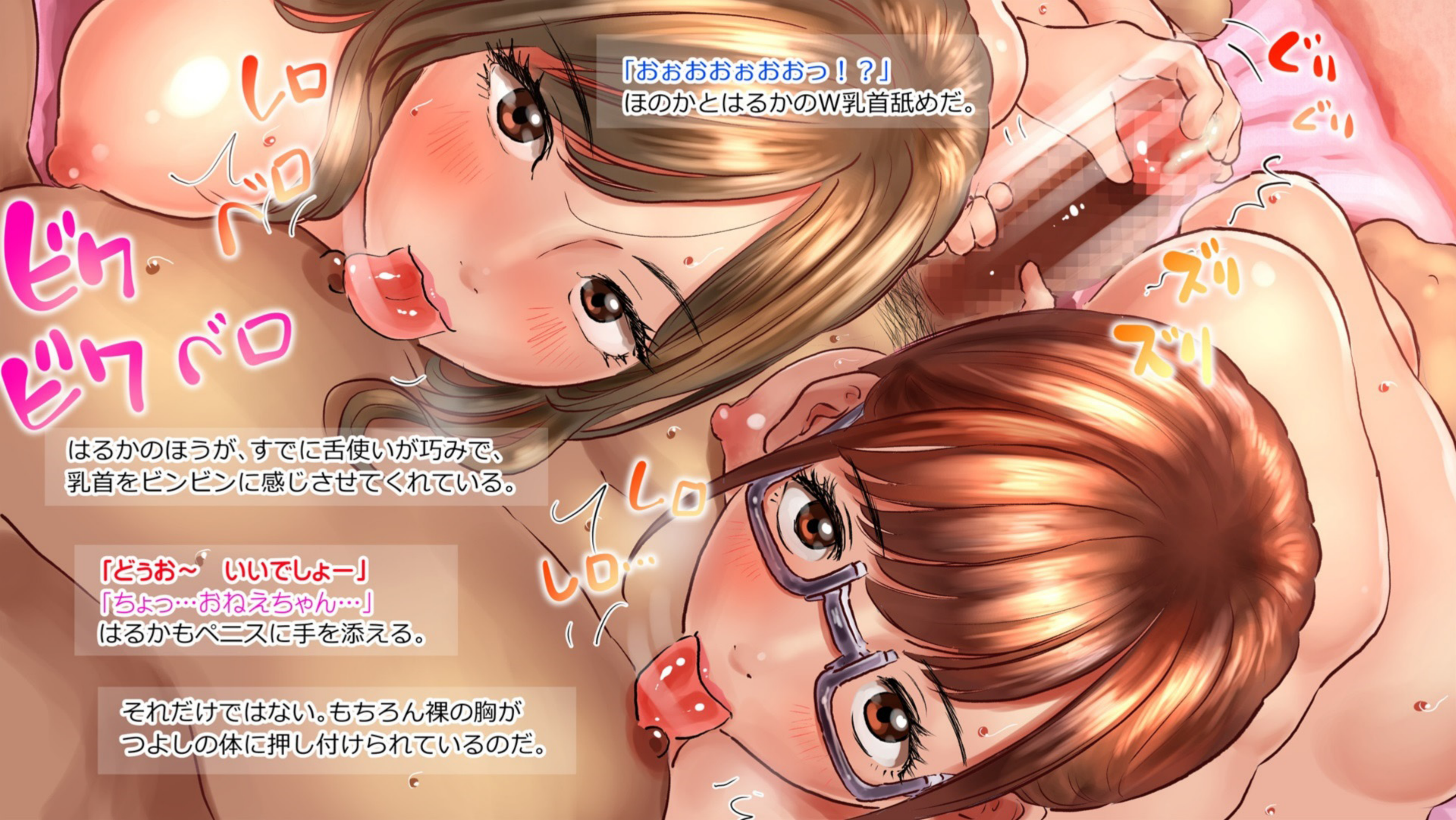
はい♡
むにゅ…♡

「ほ…ほのか…」
「じゃあ仕方ないわ 後ろから楽しもお〜」

はるかは、俺の後ろに回りこみ、
その爆乳でつよしの顔を挟む…。

ガンッ

いったい何人の男に抱かれて教えこまれたのか？
はるかは男が喜ぶことを知っている…



「おおおおおおっ!？」
ほのかとはるかのW乳首舐めだ。

しゅろ
びんびん
ズリ
ズリ

はるかのほうが、すでに舌使いが巧みで、
乳首をビンビンに感じさせてくれている。

「どうお〜 いいでしょー」
「ちょっ…おねえちゃん…」
はるかもペニスに手を添える。

それだけではない。もちろん裸の胸が
つよしの体に押し付けられているのだ。

ただたどしいながらも、ほのかは
ペニスを奥まで含んで、顔を動かしている。

腰まで振り始め、はるかに負けないように頑張っている...

「んっ...んっ...!!んっ!!」
「ほのか...!おおおおっ...」
「んっ...きもひいい...?んっ...」

パイパイ

じゃぶ♡

が、はるかがアナルを舐め始めたことで、
つよしはもう絶頂へ...

「あああああっ!?お姉さんっそれは...!」
「んっ!んっ!んん~っ!!」

「んぷんぷっ いいでしょお」
「あああああ~っ!?あああああっ!!」

じゃぼっ

きじゃぼっ!

バキョ...♡

バキョ♡

♡♡♡♡♡

びく
びく!

じゃぶ♡



「じゃあ舐めちゃおーっと」
「!??」

つよしは、首筋を舐められて、そのぞくぞくする衝撃に身を反ってしまう。

だく
だく
だく!

ふん
ん
ん
ん

が
が

が
が

が
が

びく
びく

ぬ
ぬ

ぬ
ぬ

「くらうら...つ...!!!」
「つはあ...つ...んつ...」
あはっ 感じてる感じてるっ」

「ああああああ...!!」
「.....」

あ...!

じゅん

はるかとはのかが横に並び、
つよしに向かって股を開く。

「ほらほら姉妹まんこどっちがいいの？」
「こっ…これは…！」

すごい光景だ。
姉妹のまんこが横に並んで…

「ちよっ…お姉ちゃんもう…」
「選んでえ～ 私は生でいいのよお」



ああ!!

ポポ!

ポポ♡

じゃ♡

じゃ♡

じゃ♡

気持ちいいよ!!♡

視界に入ってくる爆乳、そして肉肉しい体。
弾けてはちきれそうな女肉の弾力。

そのエロスのみなぎる体に今、挿入している。

「はあっ…! ああっ…いいよお…
気持ちいいよおつよし君…」

「ああ…あああ…!」

「もう黙ってられないっ…！次は私が！」
「ほのか…いいの？生で」

「つよし君！いいから…生で…ちょうだいっ」
「ああああ…！あああっ…ほのかっ…！！！！」

俺はもう、なにがなんだかわからなくなってきた。

生でいいの？と聞く余裕もなく、
ほのかちゃんに生のペニスをぶちこむ。

「おおおおおおおおあっ！」
「んああああああああんっ！」

あぁっ！
ビク
ビク
ビク！

ググッ！

ぎゅっ♡
B

縦横無尽にうねる膣。

「ああっすごいっ…感じては
いけないのに感じてしまう…」

「もう…呆れるしかないよ…」

が、つよしが見上げた先には、
ほのかの双乳が揺れている。

姉妹のおっぱいが一度に…

「おおおおお！すごい光景だっ…」

ほのかは、乳首を責めてきながら、俺に唾液を飲ませる。
「おおおおおっ！甘いっ…すごいっ…！最高だっ！」

じゅる
♡

ぽくっ♡

ぐわん

ぐわん

じゅる♡
じゅる♡



「おっ…おおおおおおっ…！おおお！」

「ああっ…！んああああああっ！」

「ああっ…ほのか…！気持ちいい…っ！！！！」

「ああああっ！つよし君っ！」

ほのかの膈内に2度めの射精。

「ああっ…あ…いいわあ…私も欲しい…」

「ああ…っ 締め付けがきつくて…！
気持ちいい…！」
「んいんい もっと締めてあげるっ」

「ああ…いいよお…ほのかの妊娠まんこで
締め付けられて…もっと興奮するっ…！」

「どう…？あああっ…私も気持ちいいよ…！」

妊婦二人に挟まれて困惑するつよし。

ゴニョ

だが、おしつけられる膨れた巨乳、爆乳おっぱいと
ふくらんだお腹、女体の感触に勃起はさらに固くなる。

「ちよつ…！これはっ…！幸せと言っているのか…？」
「なによお 文句なしの贅沢でしょあんた」

ワウウ

がが

ビク

パイ

ギギ!

ゴキッ!

「お姉ちゃんに入らないようにずーっと
私の中におちんちんしまっけてあげる」
「でもほのかの知らないところで私たち一つに
繋がってるかもしれないわよお」